

入行時の志かなわず去る

波乱 地銀

人材枯渇の危機 ①

由をこう振り返る。地銀に勤めたのは約3年。事業承継を円滑に進め、中小企業を再生させたい……。こんな理想を抱いて銀行に入っただが、待ち受けていたのは厳しい残業規制。思うように仕事ができず、当初の志は実現が難しくなっていた。

「夜、空いている日に会えないか?」。1月中旬、都内の情報技術(IT)企業で働く20代男性に1本の電話がかかってきた。声の主は静岡県地方銀行に勤めている元同僚。転職の相談だった。

電話を受けた20代男性は同じ地銀から転職した。地方企業の問題にもっと向き合いたかった」。転職の理

エース級行員、他業種に転職

は4・55倍に増えた。全職種の平均(2・64倍)を大幅に上回っている。

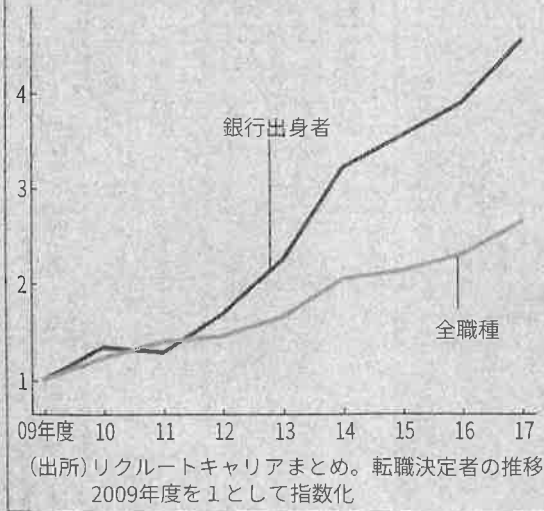
かつて転職者の5割は同じ金融業界で同業他社を転々とすることが多かったが、近年は3割とまり。代わりにコンサルティングや建設・不動産業界などが受け皿として存在感を増す。

人材サービスのビズリーチ(東京・渋谷)でも、地銀や信金から採用に関する問い合わせがこの2年間で5倍に急増した。全国銀行協会によると、地銀の行員は18年3月末時点で約17万4千人と統計で測れる01年と比べて17%減った。行員減は経営のスリム化につながる一方、営業力そのものをそぎかねない。

「退職した時、すでに同期の2割が辞めていた」。背中を向けた仲間の多くは公務員やコンサルタントに転職した。

銀行員の転職が活発になっている。リクルートキャリア(東京・千代田)によると地銀を含めた銀行員の転職者数は、2008年9月のリーマン・ショック直後の09年度と比べて17年度

銀行から転職する人が増えている



水河期の00年に入行した。行員時代は総合職として大企業から中小企業まで融資の営業に駆け巡った。「企業に担保がなくて貸せなかった。決まりだから」。苦しい思いを振り返る。

いまは電子債権を担保に中小企業の資金調達を支援する「POファイナンス」を手がける。地銀にいれば一定の年収を維持できた可能性が高いというが「しゃくし定規な仕事ばかりでは楽しめない」。

「来たるべき海外進出に備える」。臨床検査薬メーカー、セロテック(札幌市)の畑谷隆行社長は18年6月、ポルトガルへ飛んだ。目指すのは臨床検査薬の直接輸出。同国を足掛かりに欧州へのビジネス展開を描くが、商機はあると確信できた。

北海道から遠く離れたポルトガルでの視察。地元のルフトガルに相談すると、人材紹介会社のサイエスト(東京・港)を通じて海外進出の専門家を派遣して貰った。北洋銀行によるコンサルティングは1年あまりで約20件。小渡信洋・ソリューション部副部長は「本業での資金需要も出てきた」と手応えをつかむ。

金融庁は地元の中小企業へのコンサルティングを含めた金融仲介機能の発揮を地銀に求める。例えば、中小企業による海外進出や販路開拓は各国・地域の法律や商慣習が壁となる。海外に拠点を抱える地銀もあるが、小所帯で支援に限界がある。意欲の高い中小企業を支えていくには、外部の優秀な人材の有効活用で人材難を補完するといった知恵が求められている。

(南穀郎、中谷庄吾)

ここ1〜2年で目立って傾きやすくなる」。リクルートキャリアで転職支援を手がける福元崇之マネージャーは地銀マンの転職事情を支える越境融資や有価証券を明かした。

「お客様第一。そんな銀行の建前と本音が腹に落ちなかった」。フィンテックベンチャーのトランザックが、商機はあると確信できた。

北海道から遠く離れたポ